SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

「若い世代の学びを支える」社会につながる学びをめざして（生涯学習指導者研修事業：若者の学びを支える公民館）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠藤, 健 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010185

生涯学習指導者研修事業

若者の学びを支える公民館

日　時　2016年11月24日（木）10:20～16：00
会　場　静岡市興津生涯学習交流館
講　師　遠藤　健（富士市教育委員会富士市立高等学校　教育推進指導主事）
　　鈴木　剛（富士市市民部まちづくり課）

基調報告 1

「若い世代の学びを支える」社会に繋がる学びをめざして

遠藤　健（富士市教育委員会富士市立高等学校　教育推進指導主事）

私は富士市教育委員会の中でも、ちょっと珍しいのですが、富士市立高等学校に勤務していて、教育推進を担当する指導主事を務めています。

実は昨日、静岡大学のラウンドテーブルにも参加させていただき、そこで蒲原西小学校の山口校長先生の話を聞くことができました。普段は高校という立場なので、どちらかというと小中学校は地域に残っているけれども、高校になると少し地域から離れてしまうとすごく感じていたのですが、山口先生の話を聞いてやはり、小中学校は公民館（富士市ではまちづくりセンター）を中心に、若者と地域のつなぎ役になっていることを実感しました。

今日は、「社会に繋がる学びをめざして」をテーマに話させていただきたいと思います。皆さんもご存じかと思いますが、教育界は大きく変わってきています。これから学習指導要領も変わりますし、平成32年には今までの大学入試センター試験の形が大きく変わります。今までの大学入試の評価はテストの点数が中心でしたが、これからは考えたり、活動してきたことを報告したり、知識を活用したりすることを大学が評価してくれます。

なぜなら、社会がそうなっているからです。本校でも、そこを「目指していこう」ではなく、「目指していくべきではないか」と考えています。今の時代は、子どもたちに教えることがなくなってきているので、気付きをどのように与えてあげるかを考えるべきだと強く感じています。そのためには座学ではなく、教室から実社会に出て学ぶしかなく、それには答えがありません。だから考えなければならないと本当に痛感しています。

■富士市立高校の紹介

最初に高校の説明をさせていただきたいと思います（図1）。学校自体はもともと、吉原商業高校という地元に根付いた専門高校でした。創立50年を期に、富士市立高校に名前を変え、高校の3年間と大学の4年間の計7年間をかけて若者を育てていくことにし、そのために地域と連携するという大きな柱を立てました。目指す学校像として「CDI」を掲げていて、Cは「コミュニティーハイスクール」、Dは「ドリカムハイスクール」、夢（Dream）をかなえることです。夢といっても遠い夢ではなく、人生を楽しく生きてい

くための夢です。それから、Iは探究（Inquiry）ハイスクールです。この3本柱で、高校を立ち上げました。今年（2016年）で6年目になり、卒業生は3期生まで輩出しています。

図1　富士市立高校コンセプト

大学では、静岡大学に今年（2016年）から地域創造学環ができましたが、そこに昨年1人合格しました。他に、北海道教育大学の地域・環境教育専攻、今年（2016年）は東北芸術工科大学にも出しています。まちづくりデザインといったところをやっているのですが、まちと協働しながら取り組むことで、生徒が何となく大学へ行ってその先の仕事を探していくという志向ではなくて、社会に貢献していくためにはどういう経験ができる大学に行けばいいかを考えるようになってきていると実感しています。吉原商業時代はそんなに大学志向ではなかったのですが、自分が興味あることを4年間かけて追究しながら、生徒にも、最終的には自分の思いがあるところで将来頑張ってもらいたいと伝えています。

部活動にもかなり力を入れている学校です。文化部は、吹奏楽部が最近、中学校へ行って合同練習をしたり、お祭りに呼ばれてもただ何となく行くのではなく、生徒たちがそこに行ってこうしたいという気持ちを持って行けていると感じています。それから、ビジネス部があるのですが、放課後を使って児童クラブや福祉施設へ行き、駄菓子をツールにしたコミュニティ活動をしています。

実際に探究学習の「市役所プラン」で、市の方とまちづくり協議会長を中心に約80名、本校へ来ていただき、1クラスに10人ほどずつ入って、輪になって話をしていただきました（図2）。「PIR room」という部屋も作りました。今まではパソコンが並んでいて、とにかく事務的な作業を1年間こなしていました。そういう部屋ではなく、広くして椅子も机も動かせるようにし、電子黒板も置いて協働的作業ができる部屋を、高等学校の施設として富士市から許可を得て作りました。ここで協働的なことをいろいろと行っています。

図2　協働的学習と企画開発

これは有名な話ですが、創造性を必要としない仕事はすべてテクノロジーに代行されていくといわれています。10年後に47％の仕事が機械によって代行され、15年後には15％の人が今はまだない仕事に就くであろうといわれています。計算や漢字も必要なのですが、それに代わることがこれから起きてくるので、学校において協働的に何かやっていく必要があるのではないかということを指針として感じて取り組んでいます。

■探究的な学び

本校では、週2時間、「究タイム」を設けて、探究的な学びをしています。探究にはいろいろあると思うのですが、例えば何か新しい機械、最近で言うとドローンやカーナビゲーションを作る場合、本校での探究的な学びとは仕組みについて考えることです。今までの社会の仕組みは、本当にそれで合っているのかどうかということです。

本校の生徒がまちづくり未来会議などで大人と話をするときに、意見を受け入れてくれるかどうか、高

校生の立場で言ってもいいのかということで、最初は躊躇していたのですが、学校の中では良い意味でどんどん疑いの目を持って意見を発していこうと言っているので、そういう子が増えています。ですので、地域の公民館も企業も、高校生にどんどん関わっていくといいと思っています。

まず生徒たちは、今どうなっているのかという現状を調べます。今の子は早いです。先生よりもどんどん先に行って現状を調べます。そして、求める理想は何ですかと聞くと、これもグループになって、ああでもない、こうでもないと話をし始めます。なぜなら、後でアンケートを紹介しますが、今はお金の価値よりも、社会に貢献したいという価値が生徒からすごく出てきていると感じるので、理想を聞くと結構意見を出してきます。ただ、気を付けなければいけないのは、よく富士市に対して「ディズニーランドを造ってくれよ」という意見が聞かれます。しかし、それは自分事になっていないことが多いので、高校生が働きかけて何か仕組みが変わるととてもいいのではないかということで、理想を考えさせるようにしています。そうしていると、その理想とのギャップを埋めるための課題が出てくるので、課題意識を持たせることを授業の中でやっています。すると今度は、その課題を埋めるために必要な情報を集め始めるので、生きた知識になってくることを実感できます。そこから興味が湧いて進学したり、実際に活動したりしている子もいます。

今年（2016年）は、FUJI未来塾に高校生で唯一参加した生徒がリーダーになり、まちおこしのために何かしたいと言ってビブリオバトル（biblio battle）を開催しました。本の紹介をして、その順位を決めるイベントです。その生徒は、やりたいことに対してさまざまなことが知りたくなり、どんどん勉強しました。そのためにはこの大学へ行きたいと言って、受験勉強もし始めました。それが一番理想だと思っています。興味を持って、それに対して勉強していくことにつながっているので、探究的な学びが生きていると思います。

授業では次に、その蓄えた知識で実際にどうなるかという仮説を立てさせ、それをきちんと言語化、構造化させて、しっかり試させます。ですので、夏休みに課題を出しています。まちづくりセンターには、「高校生が夏休みを使ってそちらへ行くかもしれませんが、受け入れてやってください」とお願いしています。まちづくりセンターは今のところ快く引き受けてくれていますが、何しろまだ高校生であり、何か失礼なこともあると思いますので、それもまちとしての協力の一環で受け入れてくださいと伝えてあります。試してきた後には、必ず議論させます。グループ、もしくはグループをまたいで議論させ、その次にどうしたらいいかというものをまた導き出すのが本校の探究活動です。その中で、地域に出ていく活動が入ってきます。これをやらせたいがためにどうしようかと考えていくと、地域に出ていくことになったのです。ですので、順番としては、こういうことをやらせたいと思った方が先です。それをどんどん深めて、理想に向かっていく経験をして、自己肯定感を持ってくれたらと願っています。しかし、まだ解決までには行かないと思います。ただ、そういう体験を通じて意欲を持たせたいと考えています。

経済産業省では、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な12の能力要素を「社会人基礎力」と定義づけています（図3）。「前に踏み出す力」となる主体性、働きかける力、実行力。「考え抜く力」となる課題発見力、計画力、創造力。この課題発見力が一番大変で、いろいろな方から意見を聞いて、葛藤しながら自分の意見を課題にしていく作業は難しいと思います。それから、「チームで働く力」となる発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ストレスコントロール力も大事です。規律性とは、自分だけのツールではなく、社会のルールと照らし合わせながら考えていくことです。ストレス

図3　「社会人基礎力」とは
（出典）経済産業省　http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdfより一部抜粋

コントロール力とは、チームで取り組むときや、まちに出ていくとさまざまな先輩方がいるので、打ちのめされて帰ってくることもありますが、そのときにストレスをうまくコントロールする力です。こうした力が身に付きます。

21世紀型スキルも、よくいわれることです（図4）。中でもわれわれは、地域とグローバルの良い市民であることを教員間で共有しながら、生徒と向き合っています。

思考の方法	① 創造性とイノベーション ② 批判的思考、問題解決、意思決定 ③ 学び方の学習、メタ認知
働く方法	④ コミュニケーション ⑤ コラボレーション（チームワーク）
働くためのツール	⑥ 情報リテラシー ⑦ ICTリテラシー
世界の中で生きる	⑧ 地域とグローバルの良い市民であること ⑨ 人生とキャリア発達 ⑩ 個人の責任と社会的責任

図4　21世紀型スキル
（出典）静岡大学大学院教育学研究科　益川研究室
http://connect.ed.shizuoka.ac.jp/masukawa/index.php?ATC21s

学習指導要領ではこれからの方向性として、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な知識や力を育む」ことが示されているので、このような学校が増えてくると思います。「何ができるようになるか「何を学ぶか」「どのように学ぶのか」という課題の下に、教室だけではなく、外に出ていくことの重要性が込められていると思います。また、社会に開かれた教育課程の実現のため、ただイベントに行ったり講師を呼んだりして終わりではなく、そこに学びをきちんと持たせるということです。本校はそこに注意して取り組んでいます。

ただ連携するのではなく、そこにきちんと学びがあり、その学びが地域につながることができたらとても素敵だと思っています。育成すべき資質・能力にしても、どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るかというのはとても大事だと思います。ライフワークバランス（Life Work Balance）も学べたらいいと思うのですが、まだまだそこまでは行けていません。それから、何を理解して何ができるようになっているのか、理解していることやできることをどう使うかについても、高校で取り組みたいと思っています。

■段階的・体験的に身につける

では、どういうふうに身に付けているかというと、段階を踏んでいます（図5）。いきなりまちに行って、まちの人と話をしてきて、課題を探してきてと言っても話はできないので、まずはオープンマインドの発想法をしています。その後、ディベートで批判的思考や多角的・多面的思考、論理的対話をしています。それから、2年生前期の半年間で市役所プランに出ていきます。次に、自分のテーマを社会課題について考えさせ、最後は実施したことを認知して、進路につなげていきます。

図5 習得の段階

1年生前期は第一単元「序」として、発想技法を学んでいます。1年生後期の第二単元「論」では、ディベートの形で取り組んでいます。ディベートで試合を何回かしているので、感情に任せて相手に意見をぶつけても通用しないことは分かっています。なので、普段はあまり新聞を読むことがない生徒でも、生きた情報をかき集めます。こうしたことから発展していって、今度は夏休みに自分でフィールドワークに出て、話を聞きに行く生徒も出てきています。まちづくりセンターに通っている生徒もいました。

2年生前期は、第三単元「活」の市役所プランです。最初は市長から辞令をもらい、市職員になったことにして、課に属させました。環境、防災、健康増進、広報などの課の職員にしたのですが、なかなか自分事になっていませんでした。まだ行政からの目線になっていたのですが、市役所内を前指導主事とぐるぐる回っている中で、「力こぶ」というパンフレットを手に持っていて、まちづくり課がぱっと目に入ったのです。ここへ行けば、やりたいことが全てあるのではないか、生徒が入り込めるのではないかと思っ

て、今はまちづくり課と協働しています。

この市役所プランでは昨年（2015年）は10地区、今年（2016年）も10地区にお世話になりました。1地区に24〜25人、4人組が10チーム行きます。ただ、富士市は海から山まで、沼津から富士川まで広いので、各地域でいろいろな特徴があり、生徒は他の地域の情報も得ながら学習できていると感じています。今年（2016年）の10地区のうち、吉永だけは学校のすぐ近くにあるので2年連続ですが、26地区すべてで実施していきたいと思っています。

図6　フィールドワークの様子

地域と連携する機会は、主に三つありました。一つはフィールドワークです（図6）。5月にマイクロバスで向かい、町内会長などさまざまな方を呼んでいただいて、まち歩きをしました。歩いて終わるのではなく、まちづくりセンターに行って、高校生が事前に調べたことを話しながら協議して、また次の課題に向かっています。実際に試しなさいということで、今年（2016年）は夏祭りに自分たちで参加しました（図7）。行っているうちに、「何かイベントをやってよ」と言われました。高校生は射的などのイベントを文化祭でやっているので、テントのところでやっていました。最後は軽トラックに乗って、お菓子まきもしていたようです。

図7　夏祭り参加の様子

それから、まちづくりセンターで講座がたまたまあったので、高校生が参加しました。私もここに行きました。3年前（2013年）ですが、とても雰囲気が良くて、終わってから参加者に「高校生はいかがでしたか」と聞いたら、「とても楽しかった」と答えてくれました。まちづくりセンターの係の人も、「こんなに楽しそうな表情は久しぶりに見ました」と言っていました。高校生にもどうだったかと聞いたら、「すごく楽しかった」と言っていました。最後には手をつないで、自分の孫のように交流して、素晴らしい時間だったと思います。

次に、学校で中間発表をします。そのときにはまちの人にも来てもらって、話をしました。普段あまり話をしなくて、先生の前に行くと結構固まっている生徒でも、地域の人がいたりすると、顔を上げてかなり話をしていました。こういう一面があるのだから、このような機会はやはり必要だと思いました。教員の前ではなかなか殻が破れないけれども、地域の大人なら自由に話ができる生徒は、地域に愛着があり、地域に育てられてきているので、こういう子にはもってこいの機会だと思いました。

それから、やはり持続していかなければいけません。持続していくためには公民館やまちづくりセンターが一番だと強く感じています。今回このような機会をいただいてとても感謝しているのですが、持続していきたいと思っています。昨年（2015年）は文部科学大臣からキャリア教育優良校の表彰を受けました。

そんなことをやっているうちに、高校生を中心にいろいろな輪が広がっていきました。福祉施設に高校生が行ってさまざまなイベントをしたり、大学の先生が来たりして、輪が広がってきています。地域防災で一緒に歩いて、危険箇所を見つけたりもしました。防災担当から言われたのは、市が提案すると地域住民には抵抗があり、例えばブロック塀などは市が「危ない」と言うと抵抗がありますが、高校生が「危ない」と言うと受け入れてくれるそうです。それから、防災グッズなどの配布も行きづらいのですが、高校生が関わってくれるととても行きやすいので、これから高校生を活用していきたいと言っていました。それから、年に3〜4回、地域の親子にグラウンドへ来てもらって、高校生が交流したりもしています。

高校生には実行して終わりではなく、必ず振り返りをさせています。全員が気付きをきちんと落とし込んで、学びにさせます。なので、準備が大変です。私も10カ所のまちづくりセンターを大体2周ほど回りました。まちづくり協議会長にも「今日は協議会があるから7時に来てくれ」と言われて、学校が終わってから行って意図を説明したりもしました。準備が大変な割に学びがなかったら意味がないので、きちんと学びになるように振り返りをさせています。そうして高校生に意識を持たせることで、10年後、20年後に帰ってきてくれて、何か変化が起こるのではないかと考えています。

アンケートも取っています。こういう活動をしてきて、日常の中で知りたいな、不思議だなと思うことがある生徒は90％います。ただ勉強しているだけではなくなってきていて、自分から不思議だなと感じています。それから、相手や目的に合わせて自分の考えや根拠を明確に整理して表現できる生徒が78％います。なので、高校生に来てもらってもいいと思います。結構話せるようになっていると思いますし、最近は小中で鍛えられています。高校でも鍛えているところが増えてきているので、どんどん語りかけていいと思います。失敗しても、繰り返しやってくださいというスタンスでいるので、87％が最後までやり遂げようと思っています。ですので、若者にはどんどん失敗させて、本物の経験をさせてあげたいと思っています。自分の将来について考えることがある生徒が90％以上います。人の役に立ちたい生徒、異なる立場の考えを受け入れ、理解しようと思う生徒も90％いますので、ぜひ語りかけてほしいです。

自分の生活だけでなく、社会全体のことを考えたいと思う生徒も、まだまだ割合を上げたいところですが70～80％います。地域社会の一員として自分にできることはないかと考えたことがある生徒が63％です。高校生で5割を超えれば素晴らしいと思います。社会や地域の課題解決に向け、主体的に活動したいと思う生徒も67％です。こんなことを高校生は考えています。

総合的な学習の時間「究タイム」で、普段の自分の生活や将来に役立つと思って取り組んでいるから、外に出てもあまり後ろ向きの生徒はいません。こういったことで肯定感が増して、自信を持てて、行動力が出て、最終的にそれが活性力となっていってくれたらと思います。

ここは、さまざまなところを巻き込んでやっていく必要があると感じています。やはり一番身近なのは、生活範囲です。そこを越えての活動はイベントで終わってしまいます。東京にも行きますし、今週の日曜日からは海外探究研修でボストンやドイツ、オランダ、台湾などに行っているですが、1回の訪問でとても濃密な経験はするのですが、一発なので持続性がありません。やはり生活範囲の地域の方が持続しやすく、愛着が湧きやすいと感じています。

さまざまな新聞にも取り上げられました。生徒がそれを見ることで、私はこういう活動をしたのだなということをわざと根付かせるように、プレスリリースもできるだけ多くしています。これも学校の宣伝ではなくて、地域とのWin-Winになるような高校生に対する仕掛けの一つです。

■地域との連携

社会探究を他の授業にも取り入れています。市議会議員や財務省職員を呼んで話をしたり、これは実際に自分たちで出ていったのですが、東京大学でイノベーション教育をしている先生を年10回呼んだり、外国人を招いてプレゼンをしたり、いろいろなところと連携しています。富士市観光課の富士山・シティプロモーション推進室の方に来てもらったりもしています（図8）。図9は、本校の主な連携先です。これからの学校の方向性が、社会につながる学びや活用力になっているので、どんどん連携しようとしています。子どもの学びが残る連携ができたらと感じていますので、地域の方の協力が必要です。そして、それを見守ってほしいと思っています。

図8　東京大学内イノベーション大学講師（左）
外国人を招いてプレゼン（右）

県外における地域連携としては、可児高校の「エンリッチ・プロジェクト」があります。これはインターネットにも出てきます。あとは、岡山県矢掛町や愛媛のシビックプライドもあります。また札幌大通高等学校の「社会に近い。開かれた高校」という取り組みもありますし、岩手県もつい最近、本校に視察に来ました。鹿児島県や東京でもやっています。

静岡大学・常葉大学・神奈川大学
産業能率大学・東北芸術工科大学
ハーバード大学・ＭＩＴ
東京大学内イノベーションクラブ
財務省
富士市市民部まちづくり課
富士市まちづくりセンター
富士市観光課富士山シティプロモーション推進室
ＪＡＬ・あずさ監査法人・マイナビ
ＯＥＣＤクラスター
リディラバ

図9　富士市立高校の主な連携先

高校生の立ち位置としては、地元を離れてしまいますが、大学や地域、社会を結ぶ年齢期であることは確かです。県内には高校が144校あって、社会貢献をしたのは昨年（2015年）で約90校あるというデータが出ています。社会がこういう方向へ向かっているので、ぜひ連携・協働をしていきたいと考えています。

最後に地域課題解決型キャリア教育についてですが、ずっとこういう取り組みをしていて二つのことを確実に感じています。一つは、高校生は地域に貢献したいと考えています。最初はそれほど感じていなくて、こちらがびくびくしていて行けなかったのですが、これは確実です。冷めたような子はほぼいないと思います。先ほどのアンケートで見ても、本校生徒の約90％はそうなっています。

もう一つは、地域の人は若者の意見を取り入れたいと考えています。どこのグループワークで聞いても、こうした意見は出てきます。私は富士市の男女共同参画委員やキャリア教育推進委員も務めていますが、そういったところで話を聞いても、若者の意見は必要だという声を聞いています。